

# 銀座水族館 (七つの海の魚および水産切手)

—(3)—

東京支店 営業第一課 神原 勇

日本近海で漁獲されるタラ科は

タラ *Gadus macrocephalus*  
地方名 マダラ, ホンダラ

スケトオダラ *Theragra chalcogramma*  
地方名 スケツ, スケツオダラ (一般)  
ミンタイ, メンタイ (朝鮮名)

の二つに大別される。

スケトオダラの分布は、島根県以北の日本海特に朝鮮東岸及新潟富山両県に多く、北海道全域、オホーツク海、千島列島沿岸を経てアリューシャン列島沿岸及北極海入口の St. Lawrence. I. を含むベーリング海、北アメリカ西海岸沿いに Vancouver. I. より Monterey に至る広大な海域に示される如く、ベーリング海及オホーツク海の-1.5°Cの低温域から+16°C 附近の高温域までで、棲息適温帯が非常に広い事と、北太平洋では海表面を群遊しているの、オットセイ等の海獣等の良い餌になるかと思うと 720 m の深海にも棲息する事が知られている様に棲息深度巾が大きく、他の魚種に比較してタフな生命力をもっているものと考えられる。

1971年の漁獲統計に依れば、北海道周辺約50万屯、カムチャッカ半島周辺約70万屯 (主に 349 屯型北転船の操業海域) ベーリング海東部海域約150万屯 (母船式底曳網船及大型トローラー=大型スリミ工船の操業海域) 等で総計 268 万屯に達し、我国総漁獲量 905 万屯の 29.6% に当る。これらの背景には従来スケトオダラはタラコ・スケコ・モミジコ等と呼ばれる産卵期の卵巣のみを採る目的で、漁業が行なわれてきたが、沿岸魚類の減少に伴い地方特有の味覚を誇ったカマボコ・竹輪の原料不足のピンチヒッターとして登場したのが、北海道水産試験場の西谷喬助技官の開発したスケト

オダラのスリミ製法で北転船・母船式底曳網船・大型スリミ工船等の増強による漁獲量の増大があげられ、それ迄はタラコ・魚粕にしか評価されなかったスケトオダラが練製品として脚光をあびてきた次第である。

しかしながら北転船の1969年の漁獲量は約70万屯、1971年は同屯の漁獲があったが、北転船の高性能化、漁具の増強調整改良、魚探の改良ソナーの開発等に抱らず、航海日数の増加が目立ち資源の減少が憂えられている。

資源量の減少はスケトオダラの生態的面にも兆候が見えはじめている。即ち年々その成長が良くなっている事、魚体の小型化性成熟年令の若年化等が認められる。1967年には雌の性成熟が50%を超える体長は37cmのものが、1972年には32cmとなっており、年令的には前者が4才後者が3才と性成熟年令が早まっている。このことは資源量の低下に伴い1尾当りの飼料が1967年に比較して多くなりその結果成長が良くなり、3才でも性成熟に達するという環境適応現象であり、種の保存にもつながる防衛本能であると言われる。

タラは鱈と書かれる如く雪の降る1~3月が産卵期であり又盛漁期でもあり、味が一番良いときでもある。タラは大口魚の異名があるが、犬歯状の歯をもち魚類はもとより甲殻類貝類等の他、トロール船より落したカギ類及海鳥類迄手当たり次第胃の中につめこむ。`鱈腹食う` という形容詞に似つかわしいかぎりである。アゴの下には1本のヒゲがあるがこれは`触ヒゲ` と呼ばれる感覚器官で餌をあさるためのもので、貪食な魚に似合わず愛嬌さを添えている。

## タラ目 タラ科 タラ

学名: *Gadus macrocephalus*

英名: Cod fish

日本近海、太平洋岸の青森県以北、日本海側は島根県以北に分布スル。樺太の水深50m位、稚内は多ク、北は、南限附近は150m位、深サ、岩礁、又ハ砂泥地ニ棲息スル。夜間ニ捕食スルガ、非常ニ貪食ナリ。至ニ甲殻類、貝類、タコ、イカ、魚類ヲ食フ。産卵期ハ11月~3月ナリ。コノ時期ニ若キオダラハシガキニ寄リテ、クワリダニ盛漁期ニオタリ、近絶ニシテ漁獲セラル。



アイスランド-1943



アイスランド-1945



アイスランド-1940



アイスランド-1939



アイスランド-1939



ニューファンドランド-1887



ニューファンドランド-1896



ニューファンドランド-1887



セントピエールミクロン-1927



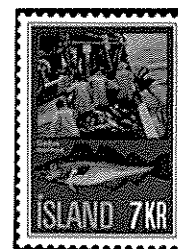
ニューファンドランド-1932



ニューファンドランド-1932



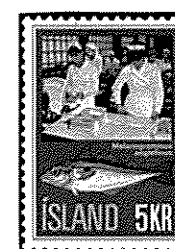
セントピエールミクロン-1927



アイスランド-1971



西ドイツ-1964



アイスランド-1971